発行所
三池炭鉱労働組合
大牟田市不知火町二
電話3033番
編集兼発行人　境　攻

本号は夏季文芸特集号二ページを附録として添加しています

第4回原水爆禁止世界大会日本大会

政治を動かせ平和の力

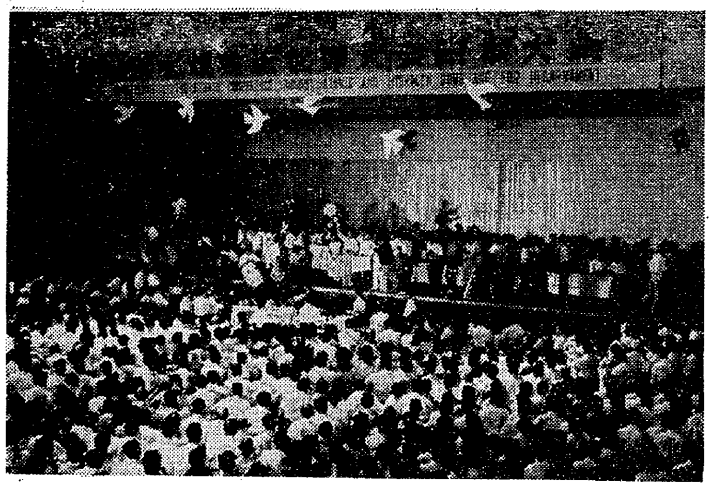
日本を原爆の加害国にする政府の政策を変えさせよう

第四回原水爆禁止世界大会は、八月十二日から九日間、日本大会と国際会議に分けて東京で行われた日本大会は、二十七カ国、七五名の外国代表と、北は北海道、南は沖縄から集つた四、四二五名の代表者、更に千名をこえるオブザーバーを集めて早大記念会堂の全体会議を皮切りに四日間の熱心な討議が続けられた。

まずテーマ別分科会と各階層別協議会で、日本の問題をあらゆる立場から深くほりさげて討議を行い十五日の全体会議で、その結論を宣言や勧告として採決した。

最後に、安井国事長から「高い壇上でライトを浴びているもののみが平和の戦士でなく、全国で地味な報いられない活動をつづけている多くの人達こそ平和の活動家である。その人達に力強い拍手を送りたい」との挨拶があつて高らかに「原爆許すまじ」を合唱し盛大に日本大会を終つた。

日本大会会場（早大記念会堂）



主な討議と問題点

(1)今までの世界大会は、原水爆禁止が国際的なよびかけであつたが、今大会は、日本の核武装阻止という具体的行動を出したこと。

(2)今までの運動が、感傷的であつたことを反省し、運動の本質と敵を明らかにして、平和を阻害する現実政策に対決をせまつたこと

(3)運動の（巾広か？）筋を通すか？「一」の問題提起は、あやまりであり目標を定めて行動を結集すること

(4)勤務評定をはじめとするすべての弾圧は、口に平和を唱えながら戦争の車をおす半政策の背理であること。

(5)具体的な「行動についての勧告」が、日本政府、国会、地方自治体にたいして出されたこと。

(6)中共代表国の不参加にたいする日本政府への抗議、エリコン弾薬揚げ反対の闘いにたいする支援や抗議等は、道迫した日本の情勢が反映されたこと。

以上が主な討議となつたが、更に大会では、平和運動を意識的にあいまいなものとしようとしている人や、全く無関心な人々が多くいること、あるいは労働者の中にも強がりをいう多くの人たちがいる現実を、よく見きわめて、より広く、原則をふみはずさない地道な平和運動を、ねばり強く展開させねばならない、と強く反省された。

三池の折鶴も「平和のかけ橋」

大会最終日、日本から外国代表へ外国代表から被爆者へと国をこえた平和のかけ橋が、数々の贈りものとなつてわたされた。

日本からは広島の、折鶴でつくつた五大国旗、千羽鶴、千人針、広島の瓦等がとどけられたが、その中に千二百羽の三池のなかま達の折鶴も、しつかりと外国代表団の胸に抱かれて、喜こばれた。又中共代表からは日本の被爆者救援金として五万元（七百五十万円）、モンゴルから一千ドル（三十六万円）が拍手のうちに原水協へ贈られた。

核武装は原爆加害国になることです

長崎の原爆で下半身をなくした被爆者の渡辺千恵子さんは、母に抱かれて「私は十三年間ベッドに寝たままですが、あの悲劇が今なお続けられていることに激しい怒りで、じつとしていられなくなり母に抱かれてやつて参りました。日本が核武装することは、原爆被害国から加害国となることです。被害者である私は断じてゆるせません」と政府に対するはげしい抗議を訴えていた。

平和のためにジエツト基地化はゆるせない

大会第一日目、百里ケ原基地の山西きよさんは、平和の旗をかかげて戦争への道を進んでいる基地の実相をつぎのように訴えていた。

「基地反対をスローガンとして立つた私は、防衛庁の出した九つの条件を支持して反対をせまる町会に、退陣せよと迫られています。私は滑走路内の農地を守り平和を愛する人々とともに三百万の私財を投じて闘つています。もし不信任が出されれば、私は町長として

【写真】（上）青森、長崎から集つたリレー隊。（下）各地の折り鶴を肩に平和行進の一行。

廣島東京一千キロ平和行進、感激の入場

日本大会第一日目の開会直後、去る六月二十日広島をたち一千キロの平和行進を続けた西本氏ら十四名が会場に到着、嵐のような拍手に迎えられ、正面玄関から入場、感激的な空気が場内にみなぎつた一行を代表して西本氏は「第四回原水爆禁止世界大会にあたり、日本原水協が行つた平和行進は、たゞ今到着しました。これは決して到着点ではなく平和への出発点であります。私はこの行進の中で多くのおそろしいニュースを毎日知らされ、ますます怒りが高まりました。この行進に参加した百万人の人々が平和の戦士として全国に広がつて欲しいとおもいます」と会場五千の人々を通じ全国に力強く訴え多くの感銘を与えた。

大会エピソード

大会事務局の宿舎となつている神田一橋寮でのできごと。草木もねむる丑満どき、床から床へ「ゴロン、ゴロン」と行進するつわものがあつた。誰あらんとみれば、これぞ、広島―東京間一千キロを世界の良心に支えられつつ走破した西本あつしさんその人であつた。

核武装禁止宣言

日本は原水爆の被害国から加害国になろうとしています。

沖縄と日本本土への核兵器もち込み、自衛隊の核武装、原水爆基地の設置などのうごきは日、韓、台軍事同盟の計画と結びついており、これは西ドイツをはじめとする世界的な核武装政策の重要な一環であります。

ソ連の一方的中止にもかかわらず、米、英の核実験がいぜんとして続けられ「死の灰」をまきちらしていることも、核武装政策と結びつくものであります。

アジアには新しい緊張がもたらされ、日中関係はいちじるしく悪化しております。

中東において、核武装した米、英の軍隊が軍事行動をとつたことは、原子戦争の危険をつよめています。

日本政府の核武装政策にともなつて、民主的自由が制限されきております。秘密保護法の計画、教育や労働運動への権力統制などは、軍国主義再現の姿であるといわねばなりません。

こうした情勢のなかで、私たちは米、英がソ連にならつてただちに実験を止め、三国が原水爆実験無条件禁止協定を締結することを要求します。そしてこのことは人類の至上の命題であることを確認します。

私たちは、日本政府にたいし、核兵器のもち込みを拒否するとともに、アメリカ政府との間にもち込み禁止協定を締結することを要求します。

私たちは、自衛隊の核武装と日本の原子戦争基地化に反対します。

私たちは、日本の産業が核兵器の保有をめざす軍需生産をおこなうことに反対します。

私たちは、日、韓、台軍事同盟の結成に反対し、日本政府が中華人民共和国にたいする敵視政策を改めるように要求します。

私たちは、日本政府に対し核兵器の犠牲者である原水爆被害者の権利を保障することを要求します

これらのことが、私たちの究極の目標である原水爆の全面的禁止への途であり、アジア・アフリカの核武装禁止地帯設定と原子戦争の脅威根絶への第一歩であると信じます。

私たちは五千人の代表は、私たちをささえる八千万国民とともに、こうした日本政府の政策を変えさせることをめざして強力な運動をすすめる決意を表明し、ここに宣言いたします。

一九五八年八月十五日

第四回原水爆禁止世界大会日本大会

平和の発言

ぼくたちだ　平和の発言をするのは
鳩のなき声をする子供たちと一緒になつて
なしとげる仕事をたくさんもつ
わかちあう喜びをたくさんもつ
ぼくたちだ　平和の発言をするのは
戦場で会うのではなく　微笑しながら
湖水のほとりや樹かげの村々で
あらゆる国のあらゆる青年たちと
引金にかけられた醜い指をはねのけるのは
ぼくたちだ　平和の発言を強くする
原子兵器から　人間をまもる　ぼくたちだ
築きあげる　世界を獲得する　ぼくたちだ

組合長に一言

三川　高田　潤

去る七月二十八日、三川支部電気分会では職場の問題で、座込みが午後四時を過ぎ問題の解決が一向に進まぬので、電気分会としてはどうすべきか？の態度を決定するとき、組合長の発言として労働部長が伝えたのは、「現在三池では機械化交渉という大事な問題をひかえている。だから、このような座込みがながびくことは、この大事な機械化問題とすり替えられるおそれがある。三川支部は何をしているのか」と、お叱りを受けたそうである。問題はここにある。

組合長は、三川の電気の職制が係長交替以来どの様な出方をしてきていたか御存じだつたでしようか？。電気分会が、この様な座込みという態勢をつくり上げるのには極めて困難な分会編成上の要素をもつていたことも。

座込みをした時の賃金請求権が内容の如何にかかわらず実質的に放棄された様な現状の中で、電気という坑内で最低に近い実収の職種が、その少い収入の中から貴重な一日分を放棄してまで何故やらなければならなかつたのか？、いかに、電気分会の人たちが真剣にしかも一糸乱れず整ぜんと取組んでいたか、果してご存じだつたでしようか。こうしたとき、その問題の解決も出来ないのに、信頼すべき組合から見放されたみんなの気を少しでも察してもらつただろうかと思うと、残念です。

それにもまして大事なことは、「幹部闘争から大衆闘争へ」の労働運動の基本線は今も変りはないと思います。

座込みだけが職場闘争の方法ではないということは私もある程度認めます。然し電気の場合自然発生的でした。一体、大衆闘争とは何なのですか。

自然発生的に起つた座込みは間違いだとすれば、それに対する指導を明確にすべきではないでしようか。それとも、三権を移譲された計画的な職場闘争に終始すべきものなのでしようか。

何れにしても、あの時の組合長の発言が、電気分会員の気持をどんなにみじめなものにしたかお察し下さい。

【お答え】

労働部長はどう皆様に伝えたか・つけ加えておきます。

知りませんが、私が電話で労働部長に話した内容は次の通りです。

実は朝から労働課の方から三川の座込みを何とかしてくれと云う連絡が何回もあつたが、支部からは何も連絡をうけていないがどう云うことかと質問をしたところ、労働部長から内容の説明がありました。それにたいして、自然発生的に座込む場合も無いとは云えないが、必ず執行部と連絡をとつて執行部が十分な指導をすべきではないか、今重大な＝機械化交渉もひかえているし、執行部が十分把握した指導をしないと、ちよつとしたことから云い掛りをつけられ全体の力を弱める、と云つた様な結果をまねかないとは限らないので、慎重に指導して下さい。といつたような事をいいました。これは執行部として当然のことと思いますし、今後も執行部は組合員大衆とは別個であると云う考え方でなく、執行部と共に大衆闘争はあるべきだと思います。もし言足らずの点があり誤解を受けられた点があつたとしたら、以上の点を十分ご理解願います。

つぎに高田さんの意見の中に今組合は〃座込みの場合の賃金問題は理由の如何を問わずその請求権を実質的に放棄している〃と云つていますが、賃金保証がなければ闘争をしないような考え方はいましめていますが、内容如何では賃金保証もあり得るということを